

目指す学校像	宮原小の152年の伝統を受け継ぎ、信頼を土台に子ども一人ひとりが輝ける学び舎
--------	--

重点目標	1 「主体性」「学びの達成」「読解力」「言語活動の充実」をキーワードにした確かな学力の定着 2 健康・体力向上と安全な学校づくり 3 コミュニティ・スクールを核とした学校と保護者、地域との強い絆で結ばれた学校づくり 4 教育に携わるプロとしての自覚をもち新たな教育課題に敢然と立ち向かう教職員集団の育成
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標							実施日令和7年2月20日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査では、国語科、算数科ともに全国平均をやや上回る結果となっている。 ○市学習状況調査では、国語科・算数科ともに市の平均とほぼ同じ結果となっている。 ○昨年度課題の一つに挙げた国語科の「書くこと」の結果が向上してきている。 <課題> ○全国学力・学習状況調査や市学習状況調査の結果分析から「基礎学力の定着・向上」が課題である。 ○「情報の扱い方に関する事項」での平均正答率が、他の項目に比べ低い傾向がある。 ○市学習状況調査の結果からは、「読むこと」に課題が見られた。	・テキストを正しく理解し自分の考えを相手に伝えることができる児童の育成	①児童が自身の状況を振り返り、言葉で表現できる振り返りの場を授業や学校生活の様々な場面に位置付ける。 ②授業においてICTを効果的に活用し、児童一人ひとりが自分の考えを表現するとともに、他者の表現にも多く触れることができる場面を設定する。	①児童が自己の学習を振り返り、自らの学習状況を把握し、目標を立て、達成に向けて主体的に学びを進めることができたか。 ②学校課題研修において、ICT活用の効果を検証し、授業にフィードバックできたか。	①児童の学習の振り返りについて重要性を教員間で共有し、日頃の学習活動で当たり前に行えるよう指導を行ってきている。 ②各学年での教材研究や公開授業、学校全体の研究授業等を通して、ICTの活用方法や効果が共有され、それぞれの学級の授業実践につなげることができた。	B	①児童の「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ「主体的な学び」につながる授業改善について研修を進めていく。 ②さらに効果的なICTの活用について、教職員間での情報交換と実践の共有を進めるとともに、より有効な校内組織の在り方を検討していく。	・子供たちの課題を把握しその克服に向けた取り組みを行っていることがよい。 ・読解力の向上には語彙力を伸ばすことも大切。国語のみならず全てに直結することなので、今後も読解力向上に努めていってほしい。 ・ICTの活用が伸びていっていることはよいが、問題点などを洗い出し、より効果的な使い方について更に考え実践していってほしい。
2	<現状> ○怪我マップの作成と分析を通して、怪我多発箇所の改善と、教職員の怪我防止指導を行っているが、令和5年度の怪我による保健室来室は延べ1,357人であった。 ○建物の老朽化による、危険箇所や整備が必要な箇所があるが、日々の点検や毎月の安全点検の結果から早期の修理対応し、施設の修繕漏れ事故を0にすることができた。 <課題> ○怪我多発箇所の改善及び怪我防止への児童の安全意識の向上への取組を継続する必要がある。 ○毎月の定期的な安全点検及び、日常の点検を実施し、速やかな整備を進め、安心・安全で美しい環境を維持することが必要である。	・怪我を減少させる取組の充実とともに、怪我発生時の対応の確実な実行 ・安心・安全で美しい教育環境の整備	①怪我マップを作成・分析をし、怪我多発箇所の改善を行う。 ②安全な学校生活を送るための生活の仕方を具体的な場面ごとに繰り返し指導するとともに、怪我が発生した場合には即時適切な対応と保護者への連絡を徹底する。	①怪我マップの作成と分析を通して、怪我多発箇所の改善と、教職員の怪我防止指導強化し、児童の怪我の減少につなげることができたか。 ②怪我の大小にかかわらず、発生時には保護者との連絡を密にすることで、信頼関係を築くことができたか。	①怪我マップを作成し分析や注意喚起のポスター作製等を行い、怪我の減少に向けて取り組んだが、怪我の発生数に減少傾向はみられなかった。 ②児童が体調不良や怪我をした際は、児童の保護と保護者への連絡を最優先とすることを教職員全体で確認し徹底することができている。	B	①今後も怪我マップの作製・分析を続け、教職員による指導や児童の活動に生かすとともに、怪我の減少を目指した具体的な活用法を工夫していく。 ②今後も保護者との密な連絡を徹底していく。	・怪我が減らない原因を深く分析し、改善が可能かどうか確認をするとうい。 ・怪我そのものはやむを得ない場合が多いので、その後の対応がしっかりとできていればよい。 ・子供たちの外遊びを奨励し健康な身体づくりに努めてほしい。 ・手洗いうがい等の励行の継続をするとうい。 ・学校の安全指導の取り組みを保護者も理解できるようにもつとPRしていくとうい。
3	<現状> ○令和5年度は「スローガン『つなげよう あいさつ 伝えよう ありがとう 深めよう きずな ~学校・家庭・地域が手を取り合って~』実行のための手立て」をテーマに「挨拶のさらなる推進」について熟議を重ねた。 ○学校だより、学校ホームページ内で、会議の記録や、取組の報告、家庭への取組協力依頼などを行い、広く情報発信をした。 <課題> ○より多くの保護者・地域の皆様方に御協力いただけるよう、コミュニティ・スクールについて情報発信を継続していく。 ○「スローガン」に基づいた具体的な実践により、地域とともに歩む学校づくりを推進する。	・学校だよりや学校ホームページなどを活用した、学校運営協議会取組内容の積極的な発信 ・「スローガン」を生かした、具体的な実践	①学校運営協議会における熟議等の概要を、学校だよりに掲載することで情報を発信する。 ②本校のホームページにおいて、学校運営協議会の記録を掲載することで、広く情報を共有する。	①学校だよりの中に、学校運営協議会の取組について掲載することができたか。 ②学校ホームページ「コミュニティ・スクール」の項目において、広く情報発信することができたか。	①学校運営協議会の取り組みについて、その都度学校だよりに開催の内容を掲載した。 ②学校ホームページの「コミュニティ・スクール」の項目更新が遅れた。この活用が今後の課題である。	B	①今後も継続していく。 ②学校ホームページの更新作業を見直し、充実した内容を確実に発信できるよう、組織の改善と意識の向上を図り、本校のコミュニティスクールの活動を広く発信していく。	・地域の人が子供に声をかけたり注意したりすることが難しい。顔が見える関係をつくることは大切だと思う。 ・地域の人とともに活動する取り組みは回数を重ねていくことが大切。 ・子どもが地域の行事に参加し学校以外でも学び成長することが大切だと思う。
4	<現状> ○昨年度ICT教育についての研修を実施し、授業でのICT活用が向上してきている。 ○学校課題研修やその他の校内研修、日々の情報交換や打合せ等丁寧に実施し、教職員の資質向上に努めている。 <課題> ○授業の中での有効なICT機器の活用方法について、更に研修を深めていく。 ○学校教育のプロとしての意識や指導力の向上について、組織的な研修の実施と実践の充実を図っていく。	・ICT機器の活用による授業づくり ・学校課題研修や校外での研修の充実 ・学年教科等部会等での情報共有と実践	①学校課題研修の手立ての一つとして「ICT機器の効果的な活用」を位置付けて授業づくりを行う。 ②学校課題研修を組織的に実施充実し、全教員が授業を公開し協議することで、指導力の向上を図る。 ③教職員の各会議やコミュニケーションの中で、児童や指導、実践に関する情報の交換をしやすい雰囲気醸成し、実践につなげ教職員全体の資質向上を図る。	①児童生徒の端末活用調査の結果がさいたま市の平均値と同等以上になり、学校評価のICT教育について肯定的回答が80%以上となったか。 ②全教員が授業公開を実施するとともに、学校課題研修に関する児童の実態調査で結果の向上が見られたか。 ③学校評価の教職員の教科指導や生徒指導等に関する項目について、十分満足の回答が前年比で1.5倍以上となったか。	①さいたま市の児童生徒のICT活用調査結果は確認できていないが、校内の状況調査では年度当初に比べ大幅に活用場が増えた(+40ポイント)。学校評価でも肯定的回答が85%を超えた。 ②学校課題研修のテーマに沿って、読解力の向上を目指した授業公開を全教職員が実施した。 ③学校評価での教科指導、生徒指導について、肯定的回答の割合は変わらないが、十分満足の数値は減少した。	B	①②③教員のICT活用の力は確実に向上し、様々な学習場面で児童が活用している姿が普通の姿になってきている。今後も学習のための教職員のICT活用能力のさらなる向上を目指し研修を重ねていくとともに、児童がよりよく伸びる授業について組織的な研修と実践の充実を図っていく。	・全教職員で授業を公開し情報共有できたことはよい取り組みだと思ふ。 ・小・中学校の連携がよくできている。 ・教職員が正しい言葉遣いで児童と接する言語環境の向上に注意を向けていくことは大切だと思う。